

ロマンス読者という装置—フランシス・ホジソン・バーネット『上流階級の女』を読む

Sister Anne's Reading: An Analysis of Frances Hodgson
Burnett's *A Lady of Quality*

川 端 有 子

はじめに

1896年、息子のヴィヴィアンにあてた手紙の中で、バーネットは執筆中の小説、『上流階級の女』について、次のように語っている。

“This is because the “Lady of Quality” is so absorbing me that she keeps me at my desk all day. She is such an amazing creature now she has begun her Adventures that I am rather in awe of her.” “From hitherto closed chamber in my brain such a fierce and lawless lady came, I cannot imagine! She sweeps me along like a tornado, however, and I enjoy the sensation. I wonder what form the astonishment she will create will take. She lives above all laws with a power and a majesty belonging only to herself...” (Vivian Burnett 242-3)

バーネットはこの頃までには小説家としての基盤を確立し、1886年の『小公子』、1888年の『セーラ・クルー』の二作で児童文学作家としても成功を収めていた。だが、その中でも『上流階級の女』という作品は、確かに異色の煽情性に彩られている。作者の心の隠された小部屋から飛び出した主人公クロリダは、荒馬をてなずけ男たちをののしり、召使を足蹴にして野獣のごとく荒れ狂う男装の美少女である。⁽¹⁾ 廉岡糸子は、この小説をバーネットの著作中、唯一のセンセーション小説であると位置づける。確かにこの物語には、美貌の主人公が恋人を殺してこっそり死体を隠すといったエピソードに、メアリー・ブラッドンの『オードレイ夫人の秘密』を想起させるところがあり、批評家フィリス・ビクスラーも、バーネットが1887年にブラッドンの作品を多数読んでいたことに注目し、影響関係を認めている。⁽²⁾

しかし、この小説は、一般にいうセンセーション小説の定義には当てはまらないところもあり、1860年代に流行したそれらと同等に扱うには多少

の留保が必要だ。⁽³⁾ 大きな違いは、これが書かれたのが 90 年代であること、⁽⁴⁾ そして小説の舞台が同時代ではなく、17 世紀に設定されていることである。同時代性という点がとりわけその煽情性をあおったセンセーション小説と違い、バーネットは、明らかにそういった小説に寄せられた批判を回避するため、意識的に隠れ蓑としてアナクロニズムを用いた。その結果、センセーション小説の“wild yet domestic”という要素、すなわち、表向き平穏な、普通の中流家庭で、信じがたいスキャンダラスな事件が起こるといった特徴はここから欠落している。⁽⁵⁾

だが、ここに描かれているテーマ、すなわち家庭内、とりわけ結婚内における男性の女性に対する暴虐—いわゆるドメスティック・バイオレンスの問題は、バーネットがいままで『ローリーの娘』(1877)で描いてきたものに通底し、さらに『シャトル』(1907)で追求されるものだが、センセーション小説のテーマと一致する。さらに、重婚、殺人、隠蔽、誘惑と墮落をめぐるヒロインの秘密を描いているという点から考えれば、この小説はセンセーション小説に刺激され、時代物に偽装したロマンス小説と考えるもよからう。さらにブームに出遅れたことによる後知恵は、バーネットのジャンルに対する自意識を強め、これをロマンス小説についての小説、つまりメタ・ロマンスの位置におくことを可能にしたのではないかと思われる。

それを証明するため、この小論では、人目を引く強烈な性格をもつ主人公のクロリンダではなく、そのわきに常につき従うシャドウ・ダブル、姉のアンに焦点を当てる。その役割を詳しく見ていくと、彼女がロマンス読者として周到に設定されていることがわかるからである。しかもアンを中心に据えると、そこには実に「センセーショナルな」もう一つのサブテキストが浮上する。そしてこの読者という装置は、メタレベルにおいて、ロマンスを読むことについての既成概念を問い直し、書き換える役割を果たすのである。

リン・ピケットは 19 世紀の女性に刻み込まれた矛盾に満ちた言説を、理想的な“proper feminine”と、理想からはみ出し、抑圧された“improper feminine”に分け、この二つの概念を次のように説明する。

The system of the proper feminine may be represented by the following set

of polarities (the list is by no means exhaustive): the domestic ideal, or angel in the house; the Madonna; the keeper of the domestic temple; asexuality; passionlessness; innocence; self-abnegation; commitment to duty; self-sacrifice; the lack of a legal identity; dependence; slave; victim. In the economy of the improper feminine, woman is figured as a demon or wild animal; a whore; a subversive threat to the family; threateningly sexual; pervaded by feeling; knowing; self-assertive; desiring and actively pleasure-seeking; pursuing self-fulfillment and self-identity; independent; enslaver; and victimizer or predator. (Pykett, 1992 16)

当然のことながら、この概念は互いに互いを切り崩しつつ再定義しあい、決してスタティックなものではありえない、と彼女は述べている。その葛藤のくり返しとカテゴリー危機が、時には反動的、時には進歩的な方向で、多くの作品にモチベーションを提供してきたのである。

この二つの女性性を、二人の対照的な女性—多くは姉妹または姉妹的存在—に代表させるのは、伝統的なフェアリー・テイルの昔から、英雄ロマンス、18世紀以来のゴシック小説、そして19世紀の小説から通俗的ロマンスにいたるまで、ごくありふれた常套手段であった。バーネット自身、多くの作品中で、対照的な女性性のペアという、このコンベンションをよく用いている。『ローリーの娘』のジョーンとアニス、『美しき野蛮人』のオクタヴィアとルシアなどはその典型的な例であろう。⁽⁶⁾ パメラ・ギルバートが述べているように、ロマンス小説の対となる女性たちは一般に、お互いの資質を取り込んで成長し、結婚というゴールに達する。⁽⁷⁾

The coming together of two women is often essential to the resolution of the plot, figuring as a necessary stage in the heroine's maturation and readiness for the marriage that conventionally closes the action. At these turning-points transforming interchanges occur in which potential rivals discover solidarity, or women who seemed to be static representations of conventionally opposite types merge and exchange identities, altering all the structural relationships in the narrative.

What is especially interesting about these interchanges is that they nearly always operate to assimilate one or both of the women into marriage. (3)

『上流階級の女』も例外ではない。廉岡糸子はその著書の中で次のような見解を見せている。

バーネットはクロリンダを「悪女」、アンを「天使」に描き、前者を因習に立ち向かう者、後者を因習にとられる者として描いた。だが実のところ、この二人は表裏一体をなすヒロインとも考えられる。…アンとクロリンダの境界線は曖昧になってくる。クロリンダにアン的美徳をそなえさせることで立派なレディになれるといった具合に。(42)

60年代のセンセーション小説はしかし、悪女と聖女の二分法に一ひねりを与えたことでも知られている。ピケットによれば、オードレイ夫人とクララ・トールボイズ(ブラッドン作『オードレイ夫人の秘密』、オーロラ・フロイドと従姉妹のルーシー(同『オーロラ・フロイド』)、イザベル・カーライルとバーバラ・ヘア(ヘンリー・ウッド夫人作『イースト・リン』)らの対になる女性像は、伝統を踏襲しつつ、常にそのカテゴリーから逸脱し続け、読者は絶えずその定義を書き換えるよう要求されるという。『上流階級の女』のクロリンダとアンを考える上でも、太陽と月のようなその対照性のみならず、二人がお互いにそのカテゴリーを切り崩しあう、そのダイナミズムをこそ注目すべきであろう。

廉岡はその論の中でクロリンダの変化に注目しているが、変化をとげるのは彼女のみではない。「聖女」アンも変化する。しかも、注意深く読めば、アンははじめから“proper feminine”の領域をはみ出た存在として構築されている。彼女はクロリンダとはまったく違った形でやはり自らの欲望を全うし、ひそかに隠されたやり方ではあるが主体性を獲得するのである。つづいてはアンを中心にこの物語の軸をずらし、浮かび上がるサブテキストを検証していこう。

ジェフリー卿と妻ダフネの間の8人の娘のうち、クロリンダが生まれるまでに、生き残ったのはバーバラとアンの二人である。だが、彼女たちは娘であるというだけで父に疎まれ、無視されたばかりではない。二人は醜く気弱で頼りなく、常に影のような存在で、館の西のウィングになかば閉じ込められ、身捨てられた生活を送っていた。バーバラはのちに子沢山のやもめに乳母代わりの役割を見込まれ、結婚するが、二人のうち、まだ気質も容貌も「まし」であったアンは、敬愛し憧れるクロリンダに小間使いのように仕えて生涯を送る。

二人の姉は散歩と縫い物と読書をするくらいで、何の生きがいもない人

生を送っていた。縫い物に優れたアンは、クロリンダの部屋のぼろぼろになったタピストリーの繕いを申し出、クロリンダの華やいた生活のおこぼれに預かろうとする。これはこののち、彼女がクロリンダの殺人を隠蔽するのに手を貸し、沈黙を守り通すよう忠告することで、彼女の人生を「繕って」「覆い隠してやる」ことの予兆となっている。彼女が常に「アン姉さん」と呼ばれるのは、おそらく作者が、このテキストを「青髭」と結びつけようと試みたためと思われる。父権的権力を振りかざす暴君に対して、抗議と抵抗を前面に押し出した物語として、この作品は「青髭」のリヴィジョンと捉えられるが、青髭の最後の妻を救い出すにあたって尽力するのが、「アン姉さん」であることは周知の事実であるからだ。だが、とりわけアンの読書という趣味こそ、ここで取り上げて論じる重要な点である。

アンが“bookworm”であったことは、本文中、繰り返し指摘されている。しかも彼女がこっそり読みふけているのはロマンス小説である。次の引用はその様子を最初に描写する部分である。

In private she was fond of reading such romances as she could procure by stealth from the library of books gathered together in past times by some ancestor Sir Jeffrey regarded as an idiot. Doubtless she met with strange reading in the volumes she took to her closet, and her simple virgin mind found cause for the solving of many problems; but from the pages she contrived to cull stories of lordly lovers and cruel or kind beauties, whose romances created for her a strange world of pleasure in the midst of her loneliness. Poor, neglected young female, with every guileless maiden instinct withered at birth, she had need of some tender dreams to dwell upon, though Fate herself seemed to have decreed that they must be no more than visions. (75-6)

ここにおいて注目すべきことがいくつかある。ひとつには、彼女が自分では経験することの出来ない恋の物語を、この秘密の読書に代償的に求めていたということ。しかもそれは、表向きにははっきりと書かれていないものの、性的な代償経験であることが推察される。隠れたロマンス小説読者であるという事実は、同時代のコンテクストに置きなおしてみると、明らかに“proper feminine”の領域を侵犯しているからだ。アンは、はじめから無垢な聖女ではありえなかったのだ。それでは当時、若い女性がロマンスを読むという行為は、どのように評価が下されていたのだろうか。⁽⁸⁾

遡れば 16 世紀から、ロマンス小説が女性に与える害毒という問題は議論の的であった。とりわけ、18 世紀後半から 19 世紀にかけて、手に入る本の種類が格段に増え、本を読むという余暇の過ごし方が、女性の間でますます盛んになるにつれ、これは大きな話題となってくる。ヴィクトリア朝の女性読者と、小説中の「読書」の表象を分析する著書の中で、ケイト・フリントは女性の読書を“a site on which one may see a variety of cultural and sexual anxieties displayed” (22) と捉える。若い女性はとりわけ「本質的に」影響を受けやすいがため、読書によって墮落する危険があり、したがってその読書には保護者が気を配らねばならなかった。フリントは同じ著書の中でまた、次のように述べている。

... the most common lesson... was that the consumption of romance led to a narrow, and at worst self-delusory outlook... The tradition of presenting love stories as potentially arousing false ideals and expectations continued throughout this period, and can be found in fiction aimed at a broad variety of readers. (263)

このような雰囲気は、当時の作法書やアドバイス・ブックにあふれていた。なかでもピューリタンの倫理が小説ないしは作り話に対して批判的であったのはいうまでもない。Vir Publishing から出版されたシリーズ⁽⁹⁾の一冊、*What a Young Girl Ought to Know* (1898) は、女性の身体に与えるロマンス小説の害について、とりわけピューリタンの論を展開していて興味深い。

I would like to call your attention to the great evil of romance-reading, both in the production of premature development and in the creation of morbid states which tend to the production of physical evils, such as nervousness, hysteria and a host of maladies which largely depend upon disturbed nerves. (121)

女医である著者のメアリー・ウッド=アレンによれば、ロマンス小説は、感情移入しすぎた女性読者に「非現実的で誤った人生観を与える」ばかりではない。それへの耽溺は「異常な感情の高ぶりをもって若い女性の身体を刺激し、その性的成熟を時期尚早に促進する」というのだ (121-122)。おまけに「この刺激は時に、自慰と呼ばれる悪癖を招くこともあり」「結果、

知力、記憶力が破壊され、顔色はさえず、目はどんよりとして、体力を失い、狂気にいたることすらある」し、この悪影響は「子どもたちにまで遺伝する可能性がある」(147-8)と述べる。ウッド=アレンの説は、ひとつの極端な例かもしれないが、このような言説が世の中にまかり通っていたことは確かである。ロマンス読書を通じて、“strange world of pleasure”に精通していたアンは、最初から一見そう見えるほど、無垢でも聖女でもなかったのである。

こうして孤独に本の世界に生きていたアンの前に、ロマンスを実地で見せてくれるような存在が現われる。母に殺されそうになりながらも命を存え、荒くれ男たちの間で息子として扱われて育った末娘クロリンダである。16歳を迎えてクロリンダは、今度は自らの女性性を武器として身に帯び、社交界に躍り出て、その美貌と強烈な意志の力で人々をひざまずかせる。町でも評判の伊達男ジョン・オクソン卿とクロリンダの恋愛事件は、アンにとってさながらロマンス小説の世界そのものであった。妹にアンはロマンスのヒロインを重ねる：“It was, in sooth, always the beauteous Clorinda about whose charms she builded her romances.” (76)。忍び込んだ妹の部屋で、ひそかにロマンスの舞台裏を覗き見して楽しむうち、アンはオクソン卿のミニチュアの肖像画を見つけ、その美しさに恋におちる。だが、あたかも小説の主人公に恋焦がれる少女のように、彼女は自分の恋を成就させようと行動に出ることなど考えもしない。ただただクロリンダとオクソン卿の恋の行方を芝居でも見るように凝視するだけである。そして心をとぎめかせて彼らの「恋愛事件」を読むのである。

To poor Anne, who had seen no company and listened to no wishes, the entertainment bestowed upon her was as wonderful as a night at the playhouse would have been. To watch the vivid changing face; to hearken to jesting stories of men and women who seemed like the heroes and heroines of her romances; to hear love itself —the love she trembled and palpitated at the mere thought of —spoken of openly as an experience which fell to all; it was with her as if a nun had been withdrawn from her cloister and plunged into the vortex of the world.

“Sister,” she said, looking at the Beauty with humble, adoring eyes, “you make me feel that my romances are true. You tell such things. It is like seeing pictures of things to hear you talk.” (86)

さて、この「読書」はアンの人生観にどう影響を及ぼしたであろうか。読者としての彼女は、受身の耽溺者からひそかな参加者へ発展する。そのきっかけはクロリンダの発言から始まった。自分の読んだ小説によると、女性の人生は苦しみであるとアンは妹に語る。だがクロリンダはアンの言葉を笑い飛ばすのである。

“You have read—you have read,” quoted Clorinda. “You are the bookworm, I remember, and filch romances and poems from the shelves. And you have read that it is mostly pain that makes a woman? ‘Tis not true. ‘Tis a poor lie. I am a woman and I do not suffer—for I will not, that I swear! And when I take an oath I keep it, mark you! It is men women suffer for; that was what your scholar meant—for such fine gentlemen as the one you have just watched while he rode away. More fools they! No man shall make me womanly in such a fashion, I promise you! Let them wince and kneel; I will not.” (84)

クロリンダが示すのは、新しい女性のロマンス——すなわちセンセーション小説だ。それは女性たちにひそかな怒りのはけ口を与え、抑圧された欲望の表現を提供し、挫折させられた思いをとげさせたものであった。クロリンダが最初の夫ダンスタンウォルド卿と結婚すると、夫妻は屋敷にアンの住まいを整え、そこに本棚をしつらえてロマンス小説を選んでおいてやるのだが(150)、アンがクロリンダの人生に介入してゆけばゆくほど、実際の読書についての言及は少なくなっていく。これは偶然ではない。アンはクロリンダを通して、新しいロマンスを目の当たりにするのだから。アンの読書は、彼女を予め定められたジェンダーの刷り込みから逸脱させ、新しい女の物語を見せた。さらにそれはクロリンダという身体を得て実現し、具現化していくのだ。では、アン自身はこの読書によっていかに主体性を獲得しえたのだろうか。

やがてオズモンド卿との結婚を控えたクロリンダは、昔の恋人オクソン卿に関係をばらすと脅迫されつづけた末、追い詰められて彼を殺してしまう。クロリンダはその死体を隠し、何食わぬ顔でいつもどおりの生活に戻る。オクソン卿は行方不明になったものとされ、クロリンダは結婚し子ども達にも恵まれる。『上流階級の女』は、クロリンダの完璧な幸せに引き換え、次第に影の薄くなっていくアンの死をもって終わる。しかしその死の

床で彼女は衝撃的な事実を告白する。この告白は、読者アンが実は自分自身の恋物語を持続させ続けていたこと、そしてその恋はクロリンダのオクソン卿殺害を持って成就したことを指し示すのである。

脅迫と殺害の現場を目撃していたアンは、誰にも気付かれず夜もふけてから、クロリンダが死体を隠した場所に忍んでいった。

I knelt, and laid his curls straight, and his hands, and tried to shut his eyes, but close they would not, but stared at that which questioned. And having loved him so, I kissed his poor cheek as his mother might have done... (363)

ここで明らかになるのは、オクソン卿が殺されて初めて、アンは彼を手に入れ、彼と結ばれる夢を全うすることができたということだ。「母親のような」という言葉に紛らわせてはいるが、彼女のキスは、眠り姫に王子が与えた目覚めのキスを転覆する——そのキスは永遠に男を葬り、死の中にとどめおくのである。彼にはもう女たちを嘲り、いたぶり、傷つけることはできない。このコンテキストで解釈するならば、アンがクロリンダの殺人を黙認し、沈黙を守り続けるのは、そうすることでオクソン卿の力を奪い、彼をわがものにしておけるからである。クロリンダの物語が「青髭」のリヴィジョンであったというなら、アンのサブテキストは「眠り姫」の過激な書き変えだ。

この地点で、アンとクロリンダの力関係が逆転するのも偶然ではあるまい。決断力も行動力もなく、意志も勇気も皆無であると小バカにしていた姉の今際の衝撃的な告白を聞いたクロリンダは思わず叫ぶ：“Weak!... ay, I have dared to call you so, who have the heart of a great lioness. Oh, sweet Anne—weak!” (356)。そして、クロリンダはアンが自分を破滅から守るため、“sentinel”として付き従ってくれていたことを知って感動する。もっとも彼女は、それが同時にアン自身の恋愛の成就を守り通すためでもあったことには思いも至っていない。クロリンダは知らないのである—アンが最初から最後まで、自分のオクソン卿との恋愛事件をひそかに「読み続けていた」ことを。いちど、彼女は姉に問いただしている：

“Why look you at me so?” she said. “Your eyes stand out of your head like anew-hatched, unfeathered bird’s. They irk me with their strange asking look. Why do you stare at me?” (116)

バーネットは、アンの窃視について切れ切れにしか言及しない。だが、確かにアンは誰も知らないオクソン卿の来訪を目撃し、(She pressed her check against the side of the oriel window, over which the ivy grew thickly. She was so intent that she could not withdraw her gaze. 81)、クロリンダと彼の月夜の逢引(it was the face of Sir John Oxon, the moon, bursting though the jagged clouds, had shone upon. 104) から、壊れかけた日時計の横で何が起こったかも、窓からこっそり見ていた。であるからこそ、次の引用に見られるように、窓からバラ園の日時計が見えることを、クロリンダに向かって慌てて否定せねばならなかったのである。

“You cannot see the dial from here,” said Anne, coming towards her with a strange paleness and haste. “One cannot see within the garden from any window, surely.” (176-7)

すべてが明るみにでた時、クロリンダは自分の幸せがすべてアンの沈黙に、そして彼女の沈黙を守れという忠告に依存していることを知る。その忠告を守ることは、またアンの恋の成就を支えることでもあるのだ。サブテキストのヒロインであったアンは、その物語でクロリンダの物語を包み込み、支配し、主体性を獲得した。そして彼女はそれぞれの物語の幸せな結末のために妹の口を封じるのである。

こうして見ると、『上流階級の女』の真のセンセーショナルリズムは、クロリンダが恋人を殺害し、地下室に埋めて何食わぬ顔で幸せをつかむことにあるのではない。確かにクロリンダは当時の書評で「最もヒステリカルなニューウーマンをも顔色なからしめる」センセーショナルなヒロインだと評された。⁽¹⁰⁾ しかし彼女はオズモンド卿への恋においてすっかり「弱き女」になってしまい、天使になろうと務め、“I am your child and servant” (309)と彼の胸にすがる。いくら作者が筆を振るって、彼女の堂々たる美貌や風貌を描いてもだめだ。オズモンド卿と結ばれてから、彼女は因習的な女性の領域に戻ってきてしまっている。だからこそ、衝撃的な出だしを持ったこのセンセーショナルな小説は、別に秩序破壊的な危険書と見なされた様子はないのだ。⁽¹¹⁾ 出だしがショッキングであればあるほど、ジャジャ馬が恋によって変貌を遂げて「天使」に生まれ変わる過程はドラマティックな力を持ち、反動的ですらある。ビクスラーもこのことについて

は次のように述べている。

Through the heroine, the reader can experience the new or even the forbidden but feel safe knowing that it will eventually be checked by the expected literary conventions or by conventional explanations. (63)

そうすると、クロリンダよりも、すべての人に聖女と呼ばれるアンの変化のほうこそセンセーショナルである。彼女はクロリンダに永遠に殺害の秘密は隠しておくよう言い残して亡くなり、クロリンダの人生と倫理を死の中から支配する。しかもその理由が自らの欲望の達成のためであることを、アンは聖女の仮面の下に隠蔽している。センセーション小説がセンセーショナルな所以を、反逆者や悪女が悪事を働くことではなく、聖女か尼のような見かけの女性が罪を犯すことにあるとするならば、表面上は脇役に過ぎない陰の薄いアンこそ、真のプロッターであった。⁽¹²⁾ 男装の少女から美貌の悪女、そして勝利を得た天使に生まれ変わるクロリンダの変貌より、すべてを読み通すアンがヒロインになるまでの過程のほうが、真に転倒的といえよう。

おわりに

フリントは、ヴィクトリア朝の女性の書いた小説に頻繁に見られる「読書への言及」について論じ、次のように述べている。

…through incorporating references to reading—at times quite extensive references—these novelists were attempting to question dominant ideas about the relationship between women’s reading practices and their responses to what they read. (255)

センセーション小説流行から30年後、『上流階級の女』の中には、女性読者のセンセーション小説読書経験が書き込まれている。そしてその言及は、本論で見てきたように、二分された女性性の切り崩しと交錯のモチベーションを作り出した。クロリンダの物語を読む経験が、アンの主体性の構築につながっているとすれば、それをまた、ロマンス小説を読む実際の女性読者の積極的な主体性構築へとテキストの外部に敷衍していくことも可能だろう。これもまた、フリントのこのような女性の読書経験と本へ

の反応の関係を問い直す新たな試みである。

だがバーネットは果たしてどの程度まで意図的に、アンをロマンス読者として構築したのかという問題は残る。児童文学の作家としてはともかく、おとな向けの作家としては、バーネットは通俗的なハックライター、いわゆる“silly lady novelists”の最後の一人と位置づけられてきた。⁽¹³⁾しかし、少なくとも彼女は自らの作品に対する自己パロディをやっているほどに醒めた自意識を持ち合わせている。ロマンス小説についての同時代の言説を知り尽くした上で、あえて取った戦略だったと考えたい。

しかしながらロマンス作家とは、またお金のために読者大衆のニーズに応えていかねばならないサービス業でもある。『上流階級の女』の舞台化に伴い、続編を要求されたバーネットは、正編の倫理性に対する批判に答えざるを得ず、物語を今度はオズモンド卿の側から書き直して、クロリンダの犯罪を無化し、正編の微妙な二人のヒロインの絡みをすっかり無効にしまった。『オズモンド卿』にはそれ自体としてまったく読む価値はなしと断ずるビクスラーの意見には、残念ながら従うよりなさそうだ。⁽¹⁴⁾

注

- (1) だが、バーネット自身、次のように認めているように、クロリンダの造型は決してここに来て現われた新しいものではなかった。

“That Lass o’ Lowrie’s” was a Clorinda in disguise—so were Rachel Ffrench and Christian Murdoch in “Haworth’s.” So was Bertha Amory, who laughed and wore tinkling ornaments and brilliant symphonies in red when she was passing through the gates of her—so was little Sara Crewe when she starves in her garret and was a princess disdaining speech. Oh, she is not a new departure. She represents what I have cared for most of all my life—from the time I was eight years old and an insensate person in authority struck me across the upper part of my arm with a riding whip, and I lifted the frill of my short sleeve, and after regarding the livid cut on the soft flesh for a moment or so, looked at the person who had done it and laughed. It was a brief little laugh, and I suppose I must have looked like the devil.” (Thwaite 249-250)

- (2) Bixler, *Frances Hodgson Burnett.*, p. 62.

- (3) リン・ピケットは60年代に登場したこの新しい小説の特徴は“its passionate, devious, dangerous and not infrequently deranged heroines, and its complicated, mysterious plots—involving crime, bigamy, adultery, arson and arsenic.”であると

述べている。そして“Perhaps most shocking of all was the fact that these ‘fast’ novels of passion and crime were all set in the context of the otherwise mundane domestic life of a contemporary middle-class or aristocratic English house hold, and that they were both read and written largely by women.”と主張する。(Pykett, 1992, 47-8)

- (4) 異装するヒロインの小説として、セアラ・グラントのニューウーマン小説、『天国の双子』が引き合いに出されることがある (Bixler 67) ように、ジェネレーション的にはリン・ピケットの“the Improper Feminine”の二つの時代のうち、あとの方、つまりニューウーマンノベルの方に属しているともいえる。
- (5) Dickens が Collins の『月長石』について述べたことばで、センセーション小説の特徴としてよく引き合いに出される。(Lyn Pykett, 1994, 4)
- (6) 児童文学作品の『小公子』のエロル夫人とミナ、『小公女』のミンチン先生とアメリカ先生、『秘密の花園』のメアリとヨリンもこうしたダブルの例とみなせるが、結末が結婚には至らないため、その意味合いも異なってくる。『小公子』については拙論「『小公子』再読—神話の解体—」『Tinker Bell』No. 44、日本イギリス児童文学会、平成11年2月 pp. 32-44、『小公女』については The Story of the Indian Gentleman—Recovery of the English Masculine Identity in *A Little Princess*, *Children’s Literature in Education*, Vol. 32, No. 4, December 2001, p. 283-293、『秘密の花園』については『秘密の花園』における英国—インドの力学、愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学編) 第34号、平成14年3月 pp. 1-26 を参照のこと。
- (7) だが、スウェイトも述べるとおり、バーネットのロマンスはヘテロセクシュアルの恋愛関係より、親子、友人、女性同士の絆が前景化される個人的傾向を持っており、ダブルの女性同士の関係のほうがその後の結婚相手より強い印象を与えることが多い。(Thwaite 108)
- (8) 「当時」を小説の設定となっている18世紀ととるか、書かれた19世紀末ととるか、異論はあろうが、ここではこの作品を表面のみ偽装された時代小説と考え、19世紀末と考えたい。
- (9) フィラデルフィアで出版され、英米両国で流通していた、年齢・性別で8分冊からなるシリーズの性教育マニュアル。医者、優生学者から「社会浄化運動家」、児童文学作家など著名人お墨付きであった。執筆者は女性向けのほうは女医の Mrs. Mary Wood-Allen, MD が主で、男性向けのほうは Sylvanus Stall, DD が担当している。
- (10) Mabel Birchenough, “A Lady of Quality” *The Nineteenth Century*. 1896, Nov, 771.
- (11) もちろんバーネットはヒロインの言葉遣いが乱暴であるとか、彼女が罪の報いを受けないのはおかしいなどという抗議は受けた。だが作品自体もその舞台化も、発禁になったことはない。

- (12) 廉岡糸子も「アンはクロリンダの冒険の要に位置する女性である。アンが作り出す幻想に従ってクロリンダが行動しているとすれば、この物語の本当のヒロインはアンかもしれない」(44) と述べている。
- (13) Fallon, p. 90.
- (14) Bixler, p. 70.

Work Cited

- Birchenough, Mabel. "A Lady of Quality" *The Nineteenth Century*. 1896, Nov : 771-772.
- Bixler, Phyllis. *Frances Hodgson Burnett*. Boston : Twayne Publisher, 1984.
- Burnett, Frances Hodgson. *A Lady of Quality*. London : Fredrick Warne and Co., 1896.
- Burnett, Vivian. *The Romantick Lady : the life story of an imagination*. London : Charles Scribner's & Sons, 1927.
- Fallon, Eileen. *The Words of Love : A Complete Guide to Romantic Fiction*. New York : Garland Publishing INC, 1984.
- Flint, Kate. *The Woman Reader 1837-1914*. New York : Oxford UP, 1993.
- Gilbert, Pamela. *Disease, Desire and the Body in Victorian Women's Popular Novels*. Cambridge : Cambridge UP, 1997.
- Pykett, Lyn. *The Improper Feminine : The Women's Sensation Novel and the New Woman Writing*. London : Routledge, 1992.
- . *The Sensational Fiction : From The Woman in White to the Moonstone*. Plymouth : Northcourt, 1994.
- Thwaite, Ann. *Waiting for the Party. The Life Story of Frances Hodgson Burnett*. (1974) London : Faber and Faber, 1994.
- Wood-Allen, Mary. *What a Young Woman Ought to Know*. Philadelphia : The Vir Publishing Co, 1898.
- 廉岡糸子『大胆不敵な女・子ども—『小公女』『秘密の花園』への道—』燃焼社、2003。

Sister Anne's Reading: An Analysis of Frances Hodgson Burnett's *A Lady of Quality*

Ariko Kawabata

A Lady of Quality is said to be a sensation novel unique amongst Burnett's work, though written in 1896 when the boom for the genre was almost over. Moreover, unlike typical sensation fiction, the story is set against a 17th century background, and appears as a pseudo historical romance. But the central motif and theme of the novel, a protest against patriarchal oppression fuelled by the power of the unconventional heroine Clorinda, share the same concern as those novels by Mary Braddon and Mrs Henry Wood. However it is not enough to read this novel as focusing only on the beautiful crossdressing wild heroine. She has a shadowy double, her sister Anne, who represents the weak, feminine, submissive angel. Repressed and subjugated, Anne always looks at her strong willful sister, admiring her power and observing her love affair from afar. On the surface of the story, she looks like a saintly innocent, but a close reading reveals that she is not at all "the proper feminine" as Lyn Pyckett calls it, for she is carefully constructed as a bookworm, or a romance reader, and therefore knows "strange things", which makes her transgress the sphere of angelic existence.

In this paper I will examine how the proper versus improper spheres of femininity are deconstructed, by focusing on Anne as a romance reader. It will be clear that the true sensationalism of the story exists not in the secret murder by Clorinda, but in the imperative of the dying Anne to keep the crime secret. Reading the subtext centering Anne will exemplify how she has developed as a subjective reader, and achieved her heart's desire in her own way. Sister Anne's reading is then interpreted as a strategy to make this story a meta-romance: a romance about the meaning of reading romance.